

『概要』

ピアノで様々な音色を出すためには ●体的な身体の使い方 ・ ペダルの使い方
時代や作曲家によって移り変わる音色 ●具体的にどのようにピアノで変化をつけるのか

1. 真の脱力とは？

ピアノ学習者は、一度は『脱力して弾きましょう』『力を抜いてひきましょう』等、脱力に関するアドバイスを受けたことがあるでしょう。しかし、脱力というのは誰もが長年かけて取り組む最難関で最重要課題のひとつであり、イマイチどういうことなのか分からないと悩む方も多いと思います。関本昌平がどのようにして技術を習得したかを、体験談・思い出話を交えて紹介させていただきます。

2. 時代・作曲家ごとの弾き分けについて

『もっとベートーベンらしく』『モーツァルトは軽くなきゃ！』『古典派をロマン派のように表現しないで！』

皆さん一度はこういったアドバイスをいただいたことがあるのではないのでしょうか。

しかし、実際弾き分けとはどういったことなのでしょう？

耳ではなんとなく分かっている、実際どうやって表現すればいいのか悩む方も少なくないでしょう。皆さんがよく勉強される曲を例に具体的な表現方法を紹介致します。

① モーツァルト ピアノソナタ K545より

モーツァルトを弾く上での基本的なタッチ・音色・装飾音

② ベートーベン

ベートーベンのよくみかける表記記号について学んでみましょう。それを実際に表現する方法をご紹介します。

★では、実際にモデル生徒さんに演奏していただき、一緒に勉強しましょう。★

エリーゼのために

悲愴 第1楽章

③ ショパン

子犬のワルツ ・ノクターン Op. 9-2・ 雨だれ を例に、ショパンの特徴的な表現方法・たくさん音があふれている装飾部分の弾き方・付点のリズムの表現・などを勉強しましょう。

ショパンをよりショパンらしく、華やかに美しく表現できる方法をご紹介します。

④ シューマン トロイメライより

とてもゆっくりで、どこが一拍目なのかもわからなくなりそうな大変美しい名曲を、どのように表現すればより人に伝えられる演奏になるのでしょうか？トロイメライに限らず、ゆっくりの曲の大きなフレーズの音楽の作り方を紹介致します。